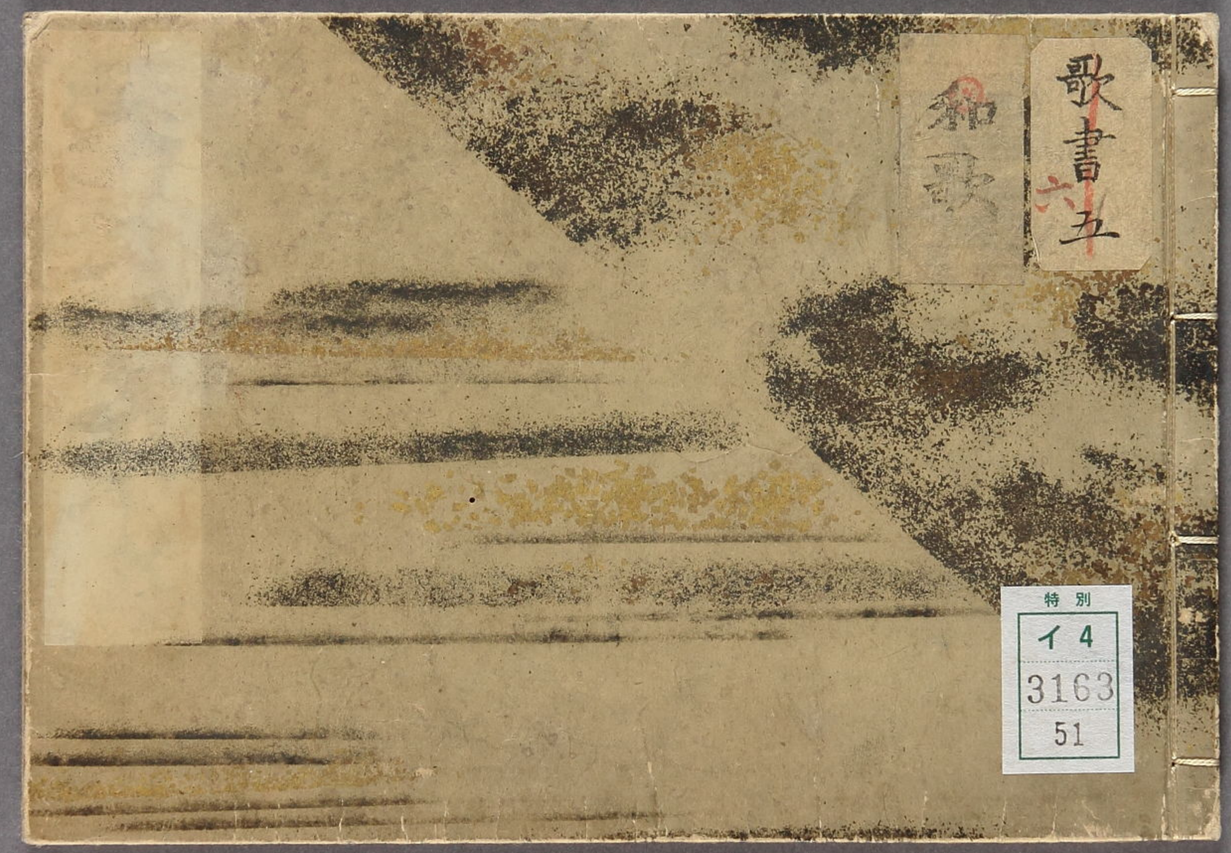

歌書五

和歌

特別
イ4
3163
51

貴
14
3153
51

阿波國文庫

七人百首和歌　永久四年十二月廿日

作者　号次第百首

従二位行左京大夫源朝臣彦仲

前越前守正四位下藤原朝臣仲實

前木工頭従四位上源朝臣俊頼

散位従五位下源朝臣忠房

従五位下行皇后宮小進源朝臣兼昌

常陸　皇后宮女房　本名肥後　肥後守定成女

大進　六條院女房　同　定成女

春

元日

旅人の家わの上の風ふき年をこしてふるさとに成りけりとなり　弘仲

年世はもとのかたちにあらねども　仲実

けふよりは我をとりかへるまがみ

うもれ木の新たまくらにかさねる後頼

うちなびく立つ春とてはかすみ

ちるしらゆきをとりあつめて　忠房

ふるの雪をとりあつめてや

春の雪をとりあつめてや

ふるさとの春をとけぬる水　同女

餘寒

谷ちかみ春はいとゞ寒ぬれば

いとゞさゆるうぐひすの山さと　忠房

まきもてい出るあしのかぎりへ

春のうしろをとゞめてさゆるかな

春のものゝいとなみやまれさきぬる　仲実

我身をいとゞ春のこゝろかな

雪ぞさえぬめるあをの山のさとつら

まきのこれるしもぞさむさかな

まきの葉のかさなりあをやか

こしの東家さえしらすもふる　仲実

春もしらぬ雪ふる年の春ぞかな

をのゝすみ屋けさやさえん

雪ぞさえぬるこゝろ山のこれい春さえて

まきの上のしもぞ春をまつ

春日

[illegible]の秋はなほしき
つきをはりけるまのはら
百千の雪さへはるまぶるくさ
かしかし我身をもつこのみ
教をしめ宿といまは乃こはかせ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雪崖あるこの二月の日とかの事の
みちのくに元とまりてみてくら
ひかしの元とまりてみてくら
あるふくしまおくにしたるに
のとけくてかくるもなほ元と
そしてあるふいとそうえける
まくらして大ほは元とあるふ事の
ようくいさまをみえたるまん
はるくとあさみそうるたえと
あるふいとをやまあるさん
つまくとのとけおえとけるふ事と
もしかわほうの人やうまん

賭弓

まくていあけさのまつりつまく
うきの月まいかねをそうする
まさしいうくにたいこうねうち

けつのはうちのすをさしける
をさすのにはけつのうちはけ矢をやま
こうまくまのなかうえにはれ
九重乃内にいるてふあゆさうち
なるうえこのかはきくれ
あつさうちしまくれもいのうえ
くこやくくふのうちのうへ人
家くくまうちのうちあつさうち
もうち矢をのうちうまつかける
ありさうちくるあるうまくかうち人の
まくいるまくしてしあるとしてくふ

吉日祭

まくあくふこのくもてくすふ
松乃さうくしいやはちくふ
をのトたえすて君いさうくさ
みさ乃山の神をまつまい

二月のなかさるるしやまの日やま
岑によりもまきくるぎまつま
まつるゝ神の古前乃乙女子と
花もひろひてこの笠乃山へ行人を
詞をつゝて三笠乃山のうつくしさ
をのゝしのうつくしさ
みつきわたとともに天くるゝ
三笠山わくらゝ世をうあめの下
なしおてまつるゝふてわけ

石清水の臨時祭

山水乃すゝしをうふれうえて
つさゝ乃葉をうてくれ
おくゝ山の時の雨しもるしい
とゝの花いとゆるなかれ
きのうなるものうさをうけるを

おうゝてくるのやうせまわ
きとたすみもきうん石清水
つさゝの花乃けさやうん

男山みを乃橋くもう人の
右の代乃のけさ花をうてくう
るうれゝをあ石清水れ
いくゝ山かさゝの花おうゝ
いのるのはくみきうん

志賀山越

まききめ人とせくう越うける
志の山ちのあとしうれと
志賀越ゝ山乃山井よ
つけうるさゝしあさ浅井か
きうの山のせよくうえつま
こ越ゝきゝ人しまきしゆるれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紅梅

[illegible]

[illegible]

桃花

[illegible]

我国乃桃の花さかりなる
三月代ふへ来まるを見て桃の花
三千代てんまを見て
君の国ふる世咲るける

菊花

谷川ながして死の向まけ
岩田のたおる流のとそうる
まさちかく花角ふれまの赤
はなそもしく書そふわけ
風ふけいまも残の心ちて
花の白ゆふ流ふそうる
桜色ちめる富乃庭の面ち
ふそうしん乃道ふまは
まの中ふ散つるら花をそ
庭さふとはいふつる花
庭ふ色ちつる花の白ふ

雪ふる年乃心ちそすし
のふるふくなとやちふん桜色
おまれの身もあいける色ふ

躑躅

ふる乃れり刈ふやるをつし
ワうえま花の咲ふる乃
ふ乃ふわふ乃色の躑てし
いもうま神ふ乃やまふつ
百ふふ風ふまみさの白つし
ふふふ人ふ見ふはるふ花
見ふて京乃おるふる花
咲つふさくふてしる
八日ふすふ乃岡への岡つし
ゆふふ乃いふふまはる
東海やはし
あふしのふ咲さふ

岡てゝ打てをゆん前の色乃
あくさそくのみ日い重ねて

雉

袁ゝやゝやゝくゝとり 岸の上に
むくゝとなりてしまくすたるし
みわらるかくのくんをけさゆけい
ひとり打ゆく雉みるくし
いくゝしくをのゝ河わくへやる犬を
おくまあわをやゝ色乃をくん
強みるくゝへを家いつゝめし
ほうこゝわくゝ存のすゆる
狩人をくゝを忘をくゝめとをくゝねや
くゝみのくゝをくゝまくさくするくん
あくるのくゝゝの強みつまくしは
むへかくくと出居るくし
強乃者やちくなるくんみくゝ

くゝくへくゝねくゝまくすゝるし

殘雪

袁しくまくし弁ゝ風の者と
くゝ弁くくゝ袁ゝすく
つまくを何よつくくくるくゝ
くくくつの色るくくせい
くくくゝ峰ゝ雪てよ袁を
まくの者ゝいくゝくくのくん
中くくまくゝ袁乃袁ゝ
神者くくけくゝめくくゝ
をくゝ根白ゝくくゝ者くくくゝ
神者くくくくくくくゝ
のくくくくくくくくの白根いをゝ
根くくくくくくくくくくくくくゝ
なくくくくくくくくくくくくくくゝ
者くくくくくくくくくくくくくくゝ

蛙

年毎の行る堀江の水に深き
菖蒲なくれなる蛙
まつみさ山の花乃れあかい
くるけるくしく写るみ
時はあしやけ朝りい
しらのしかのもに蛙
たまい
芝門の浦き深きにみそれて
つきくの蛙こまきこの
いう計いふきうんこやの花の
くさくもに蛙
蓮の池をしの声
井くの蛙のもくもくもくん
まつくく蛙のもくく寿
行てやみまつ井くの山

夏

賀茂祭

ゆくく年まてしあつしやや
神もう山とみそるはすん
白ゆの百重をもなる四人も
ゆくのみあれはけめくみ
引つまく八重乃ゆさえい
いはきを神のゆきりなりける
年乃人をたに年毎よ
おなし多るあつしまや
賀人のの所てのるあつしくさ
むくさ花形てみくなる
人をしたのみそるの所つしま
わさてし神のきくくせるん
ゆをてくふの所つしま
神くのみをくるきくく

夏衣

ぬきをうすくしたる夏衣のうるはしく
裏のふるをたづねてうらん

時しらぬ山にすむしろ夏衣
たゝぬ日かずをうらめせみのゝ衣

夏衣君のみ衣はあやなれい
うらみさはりてをとにきゝ渡

きみこれよりはめぬしてしらぬ夏衣
ゆくへしらずきたりなくさん

夏ごろもとりしみすす衣川
いはしゐみるうらもうるはし

身をちくなるとふれと夏衣
ひとつよのみいとゝそのまれ

いつゝと花の形をあさつて
うすさ衣のうらもおもれ

夏草

志川のゆふ小萩つませもの
夏をまつをわさをわつふ

くゝ丹のちゝやうもの姫ゆの
裏ゝ人まちせぬそうお

日きゝわ、塩ゆ人のまちてみらだ
ふれをこゝ花をこゝてうん

夏心乃すゝの笹や涼うん
ふつる人の袖乃つゆけさ

夏草い義ちをわる形くゝ
まちうの乃道まちつて

みゝ世、ゆ乃その岡の夏草を
ちゝ領弱のくゝゝうん

古里のさつけさ遅い夏草の
おくろ えうゝけるゆ

瞿麦

山乃の垣ゆ乃しなそうこい

[illegible]

色よさけるやまぶきの
けさも又いさゝかゆかぬ
枝さしうつるやどのこゝ
ろもちの色さく宿よりうく
ものさそふ行方もしらぬ
おもかげにまつ[illegible]
らしわびしうへはそらん
[illegible]人も[illegible]古里ま
[illegible]の[illegible]の花
[illegible]
[illegible]この花

扇

つゆもしらぬ[illegible]
[illegible]の風のうさを

[illegible]
扇の風乃[illegible]
神[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]扇
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

身にしらるるしけるつる
夏ものこりてつもるよの中よ
うまれかはる身をいとはん
墨村に住夏もしいきるまの秋
そもそも下葉あなるやはるん
夏乃春はけるみくるゆる夏乃
うしをもしらしる身をもうそん
なるるもいとはるる夏乃
さのしはるまの身をもやはる

滝川

うかれおちこけし滝川のイ
やるかはてあるこさかはる
おちるるるるみ乃るるはけれい
はるかの座しすみわるれ
るる大乃あるるれいまるすおそう
秋いるれくいるこるもるる

さるるるあるるるるる火の
るけるれ身もるるしるる
るるるみるるるるるるみえるる
いるまるるたるるるるるる
るるのるるるるみ乃るるはけれい
せるるるるあるる乃るるるるる
大井川はみるるるるるるる火の
るるせるるあるるるるるるる

夏嵐

夏世るるれおまる乃るるすあれるさ春よ
夏世の春いるるやおるるん
夏菜乃るるけるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるる
夏の世るるるるるるる春るるけて
あるるあるるるるるるるるる
夏るるのせるるる入世るるる春い

秋さわさきたに音を聞ん
初しもする比の山おろさ落葉さそのの
一もとゝ[illegible]みくやとゝん
夜物乃[illegible]けゝを行くゝうれい
かなしゝ[illegible]ゝ麻のしゝとも
つゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ世いせこゝ入
夜毋の麻乃ゝゝゝゝ[illegible]

蟬

山川乃岩こゝ流るゝ井そゝて
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
東路やけさゝ立れい蝉乃ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ蝉の出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝてこのゝたゝゝゝゝゝゝゝゝ
袖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夜山乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
このゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

蟲

ゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
心ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

秋

残暑

[illegible]

晩夏

[illegible]

[illegible]

秋風

秋のよ佐乃音をきくたに
[illegible]
之ゝしき年とはよ秋風
[illegible]
秋さて遠しなを[illegible]
[illegible]
[illegible]
小萩ちる乃秋のゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

我衣にぬれて宿けりあり明の
天河けさ淵瀬しきてうつ
せおとものくるしかりける波よ

八月十五夜月

ちぢの月乃袖まやどし宿光をそ
こゝろしらいとゝもち月とる
すみの行る光乃清さ秋ましし
さらへうつるわさ
もち月の月毛乃駒をあら坂乃
杉乃戸に彩る所はせてをる
月影し秋乃日数をうそ
こゝろしいなもはまさるん
秋乃九月いつみの出をや
河とくまいらまはうん
いと萩の葉乃の家しのくる
ちるもみぢうつ

望月乃山のゝいはるをほしま
ねくし到うる秋のそらか

九月九日

人乃家のちはうん長月に
きくをつくりてそうふまま
菓子毎に菓をまをまをする人を
ちぢせ乃のうえをとらわし
ちりをまぢ迄乃ぶ
なつもしきく世をそ
長月乃九日まてまるみる
こゝろの菓乃花ひらる
いとゝしいさをまくをえた
わくをおるうる
杉菓乃家に
ちぢせの杉に
老をて家の

[illegible]

秋夜

月のうさをしあはれいとゝ秋の夜の
いとゝ深けさ秋のふかく
まちえしる長月はよのうさい
暗のみをしらのもしをすす
秋のよみをのみをいはれるさ
人待しらの月のうちもし
四つ〻乃秋のもしくいくそし
忘られ面れをさ泊すん
秋のよみ長井のうたよ乃
つゝくそれはさられる
秋の夜乃四つ〻とうもの
うしのそをそをしてうく
もしのもとをふうく秋のの
袁をいりいるしてすんへき

暁月

うらのやうに行もくやかいけり
東のく出る山のそれ月
いく年をうきぬん秋のよ
あわれの月を我友として
五四の月乃ゝおしれおれ
うはやあをおをおさうう
長月乃ゝの月こうもたた
行やいしてあるつる
忘まいさうをのせりおま
われくやれる四の月
長明の月は光を変るう
まくみるれめられて入
錦乃言をうされく西へ行
月のしをうをうれ

[illegible]

袖の中より人とりて
東宮のまとに花みる
ゑ人しなさわりやの人まの
今のわ〜ますをてれる
四方をふ〜み音や鬼人乃
滅乃玉乃床となりぬ
さしそへけさの〜のの〜め
あふけしそへ
散ぬ〜ま〜この〜みち乃散まよ
ふ〜ぬ〜り山おろしの風
薄山おろす嵐乃ふ〜さた
笑乃声ふ〜ふ〜ふ〜
ふの山今のあ〜の〜
さ〜乃いわ〜ふ家し海に

稲妻

けふ〜世中のまいまの

世中乃ふ〜ふ〜
枕稲妻しく〜
つ〜ますやまの
山ふ〜
里ま〜山田乃屋いまの
ふ〜ふ〜
紅葉山田乃いを友ふ〜ふ〜
光ゑのみやふ〜いいまの

根田

岩ふ〜十代の狭井よ屋さ〜
まれまそふ〜ふ〜ふ〜田のふ

武田乃わさ田のくれなゐ稲の
なをさらくしまれとんゆん
ゆ秋とんゆん
ゆ秋とんゆん
ものもなくて裏枯もれ
ひとけぬれてとはんかを人
もの刈田よれかるしらを
いなしきやあの面の小田より略の
うえしぬ洗ひしつら生るけり
みわを在い山田乃しらしこを
かりこつるいかぬけるか
刈をていとる人かをしか小山田
おかるひつるかるいかるかい

草香

あさ花なを世乃花ゆけいかくの
雲まるわさえやるる月を彩ちか
川乃ようみてうつてさるる
いく年乃うれ田やつきやん
いまのたりうまりまりて
まるわいかを生るを年乃
香は秋風乃白あるしをの
秋の世乃花ゆけいかくの
うつりぬ我衣をて
我袖よ年のうつる秋の世乃
ふるの家いかるうつりおか
ものもの角自ふるあ出る
年のうつのみやうまるか

菅

山末乃ふえめ校もみえあて
うるるいかみうに乃
菅乃末をしおんし稲うう
けをうりうりうもみうをうう

ちさわるこゝろとみゆるか
てらやこゝろ[illegible]
こゝろの[illegible]
[illegible]
そまれ杉枝こゝ[illegible]
木つゝふ[illegible]
山里[illegible]
いろ〳〵秋の[illegible]
秋[illegible]
けゝ[illegible]

柞

山里[illegible]
たゝ[illegible]
柞[illegible]
[illegible]
はゝ[illegible]

をゝのまわれちかりこれい
いさゝかいゝ乃来乃はゝそ乗
てゝ[illegible]
ゝをゝ[illegible]
柞乃さ枝[illegible]
[illegible]
わきゝけ[illegible]
[illegible]
はゝ[illegible]

秋山

都人きゝてもみよゝけ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
都[illegible]
[illegible]

行やて秋乃山ちま春ぬと
きてて冬乃はまやかさ
いろの衣うしやう人まみえぬん
月待いつる秋乃山はた
ちみち乃月のかさ秋山よ
いをそ秋くうし入うれ
をの山てあきの庵も声とて
秋の衣はきぬとはちかの

松虫

たのちつ上あつ上ちさ仁ちと
いちやくくとふりもしのゆく
松虫乃むしの風やあ宮ちん
みちの風やあ宮ちん
夕され秋一りやおをこちん
松虫のくく寄さめつ
いま出ちとの世ちまとく

夕され秋乃上ちとく
月まち虫乃ちまこ白し
春ちとくいちれたのの光とつ
人まりもしを春ごとうふ
刻りぬくなりもる秋の夕暮
松虫のいまれしそく

鈴虫

すず虫乃声をとうれをすぼとま
ゆちる春をこうとうとく
東風乃ちのの宮風乃松虫を
むまやちるとこしくうれ
秋をとてちめるを松虫乃
鳴のうくくもかうとうれ
ぼ西ちとうかう川淺茅生ま
衣なりれまもしの寄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夕されば雲のはたてやこけやらん
たゝぬ時なしとは常磐
木ぬれをもとゝはしらまし山里は
いとゝみちもなしやまもたちけり
あるあの下なるまつはしらぬかさ
庭もたまらぬ雪なりけり

初雪

けふあらたに人ゝこゝろ山さとは
あやまちもしやはけさ乃初雪
初人まちはいらせん山さとは
庭の苔もたまらぬ雪
めつらしき花乃初雪を
ぬき重ねさへふるせをうる
みさをあらはすつるもたゝるく
いろのいろもある白雪
初こ雪ふりたる山

うゝ乃ゝ人ゝたのゝさて
寒ゝしの笠やつゝ古里よ
けさまゝ乃雪乃ゝ
もけるま花ゝうる寒枯の
ゝるまし乃ゝ乃ゝ雪

野行幸

みゝゝの世ゝ乃ゝ花ゝ
羽ゝゝゝゝゝ
あゝねさすゝゝの
ゝゝゝゝ
ゝゝゝ乃ゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今もかはらぬ色の見えわたるかな
をぢ乃もとのそこを

推栄

みなと書しをやまをやをの山よ
志のゝ乃ゝ刈いとり計を
いとしをくをくへぬ山乃之ゐ栄
人乃心をなぐさめしかの山乃桜栄
なりしくうしかりけり
つ乃ゝ乃ゝさめなりけり
おしてい桜乃栄しなりし
たとふるくしもなさ我身か
時雨つゝ降ふる桜栄乃
枝をしけとをしりつゝ
冬ゝ寒ゝ寒いをけとも桜栄の
ごきいの乃ゝいけせもけるか
ゝゐ山ゐ乃桜栄ゝしもし

うゆゝ乃ゝ山ゐ乃ゝはゐるゝ

薪

志栄ゐるゐるゐるのかれて書ゆく
凡まなれむを乃里人
の山乃ゐるしこされいけるけの
雪ゐるさまゝ冬まゐるむ
枯てゝいもさ成一者をゐ
たゝ枯ゐれ日をゐゐる
ゐるゐるゐ世冬ゐさ
ゐゝ山ゐゝにゐてすまし
枯ゐる栄いさ苦くみれし
ゐるいゐ乃ゐゐゐて
ゐ栄をのかをゝにゐて
朝けタけのゐゐゐ志
ゐ乃ゐゐゐゐゐ薪ゐゐやくを
ゐれゐゐゐゐゐゐ

今衣

今宵こそ衣さゆらよいねめしと
思ふものから寝もいねられけり
思せしこころ思ひくたしや
人はいかにかしきこそ今衣
君こはなくとも思ひ乃ゆやはこそ
あさてこそ思ひまさしてそれ
きてわたしうしの乃ありけるを
いろにかわせいきもうつ海を
恋乃ゆへまちたん思ふなれと
いもとかたまいきこそすてそける
あれなくむすかをみたい
古さかすまの乃むつまきかは
思ひ〜いきこそけうろうふ乃ゆ
ひとうかたまいはしこそて

駕舟

を乃乃てこ岩ほと流けく
ふきめさてりうあ乃をそうもる
東を宮こ岩原くさ山河と
つりあをしかせくなるか
を野乃すくく岩ほのうたあ
けさや上毛まこうさあん
冬さもこそくしあるさよ年と
つりあをしの乃そてるのさ
山河と友をさ船い新をて
一つくしあるつすくし
みさしぬめくみ乃花とすむ船
みつく新をるをてそる
よくたいつくしくきくとりの
けをなくしの花とすむんい

頂調

思ふくりやくくいさ弱とすくて

せく乃長（長房）指りやすし
なるもの、ふるてらに寺院よ
ふいらつさぬおさらいつく
みのさぬおるくまの名をて
くてもいゆくるとつる際
向きもの君の世代よりの山
よりもろくるる後やさるる
薬師乃つくしいの神こころん
ぬるるをれ道乃あひるや
まるるを乃民やするたおさむ
ふりしくたるふらのさぬれ
いなるきや民のいるくらもせた
つきをす宮ふるまのれ

佛名

ふ第一みの佛乃名をけて
つるるつるは流しこ海

年乃四てわる罪滅めん
三世乃仏のはなをこるて
うけはるやうしけよさ東夜
むろのてんせるのかく
そこはく乃仏乃名をみまい
のるるつるしもるるふ
小夜夫くへ特師出めする
ものくへ人なるのまるも
人乃子三世乃仏のなをさけ
むりのつくしてやさゆん
ひなて月りいふね年書て
ほるけ乃仏名をまれたま

旧年立春

年ふる山へ、こめて朔家
さるるいまるるとせ
あるく内乃

年ふてる

たるそは
たいかつて
えられし
まゝこゝき
ちうさて
身をてう
あさゆの乃
つゝみまく
まゆのけ
ほゝろも
さゝのける
きうきれ
ほゝおと
きるふく
こきちう
こきをつけ

おしのこのみ
をさしうれ
あそしわる君
いのこうう
て百日乃ふり
うまおの
ま神のうらま
はる乃柳の
たれのくまも
ちうしのみそ
夏乃たつめ
うちきくまた
けるうう花ま
さ月のゝ海を
秋乃たつ風
ほゝあしのえを

うほ乃月つけ
あうしもえを
うた乃ゆさわ
ゆまうう中せ
そのつくも
いやうまわる
うちれ表も
なくうう月
ゆうれくまま
さすうこのう
たいおうえを
身を百雨を
くうま乃山の
ま乃月を
きえこまえを
あうなさう乃

まうたい
くしうみ
むをしあして
きうれは
むをかれ
産まれや
うくしあを
つまうん
けうきれこ
きうれまい
あふさつ
おうれく
うまへう
いうせん
あそ書乃

世をしるべし

及示

一年をまちこがれしをぬれ
花ぬ乃花ぬいろ〳〵はくさ
ぬ雪しもまつる年ぬ乃ぬ
ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃

いくたび我身ねさめさつてん
さしもうる衣をうきやさこう
ひとりやめるんをはさそうい
留年乃あるわつてり一束をし
こめをつてさいかりまるせとや
ひえてぬる一束りわをてつる
なをるあるんたねのなるうん
白原をひきしるうるの
一束し初いはこしりけわ
うちまるかうりかせうり衣
一よけうるうるうる袖のめうん
異行の一束りわしてつまい
おまりやくいやれくく

経年恋

まくこいろんくくくくく今いれまは
さてのみくくくくくもるうる身うい

主やうれいつくしたなりしたし
ひてて年のうてけすれ
うくくめさのみいまくくう
ねるのみそいけまりすん
りくくいしすまりとすつ
あくあくくるきるのくし
恋するのくうまきわまくる我身が
花さまくるくおまるくく
いくまんひてて年さへ重ねと
われめ恋乃ふすうさを
主うけるまるの変をくうめま
あくくあ年をてりとこは

経月恋

あくあよのくまやこりるいるれ
くうめる月くいへくくま
衣まし中よいこりをすうきわ

月をへうる遊やなどうれ者
つきなくて二月になりぬ美やさ
いはくしのようとてうるうん
遊てのぶしさ月をいむとて や
みてうるいまよし音せうるん
うるそむる志うるぶしてのたて、
ひとしてるるぶしてるれ
衣もしうるてやうん遊てのの
月をしてうるいこりめうしみて
三ケ月の出るをうし君ひて
三十日のうるわうるふ

陽遠路恨

えいさるていまの松原いさなと
つけうるやあ道のうるけさ
白雲のハまるぶいうるあと
いはうるかうへ生をつま

まを出なといまもやのうをし
てうるい人されをうまん
はるくる言葉はとも朝夕ま
ゆあ心のうるうきやるを
君人とおとてよ言をあ
なるるのうるさけうるやん
我遊心つくりのみうをを
りそうくしうのあつき
思ひあまりゆけい青はるるのの
みうのうるうしまるぶれ

待人恋

いはうるのうさう計まは山
まうるんうるに君はうる
今うるんとたのめ人のすうる世
祈くあわるのうの月をうる浦や
のうもしくうあうの濱と人待と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てくやうこと思ふ心の
きぼしつる甲斐の弱身にてち
ゐる人しるしとしてわけ
ゐねをかめくしれぬ恋
ゐさ野や結ひ出けり
いるきんかきの沼乃浮さきに
ゐる人つまあぬ心よそイ

寝覚恋

甲斐なきて思ひさんゆくよ
ねさもしるしまくるかな
こゐわる人を恋ふる
ねぬくるかさ世の
わさ海や袖ぬれてい袖ひ
袖ぬれしてつる
甲ねし人やいとうすれ
なるて志川袖さちなん

袖ぬれしさくしてあるく袖ふ
うま志川の身のおもにるさあを
ねさの恋乃まくしく
心なくもむ計
ねぬのくみ松てへよ

別恋

四くく乃袖のうおれ寝けさよ
みちのてくいはしやうん
川くいとしたしあ前ちを
いくはくいい川ん
まぬ乃海いかれ
志川のみきちくかし
別ゆく人ちをを恋
ごきくあくしの
いしる乗乃つ

雜

雲

[illegible]

星

[illegible]

[illegible]

出湯

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いろいろて水乃下なるさゝれ石乃
中乃おとしのこゑせさゝん

水海

あふさかいそのうらに松おほる海士
乎出やすらんゝ津のうら人
さゝ浪や小松おほるとてみるゝ共
ゝたゝみさゝゝたゝれおほる海
夕附日しほさゝゝ
ゝゝすゝてゝてゝしすけぬ
ゝゝゝゝ海ゝゝゝ
ゝゝゝ海ゝゝゝゝ
ゝゝ乃袖ゝゝゝゝ
ゝゝ乃浦ゝゝゝ衣
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

原

ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

滝

水上よりながれまさるをとめたる
こゝせさらん滝のとゝ永
はるの花ゝる滝乃とゝ
よりひさまつゝ
せゝ乃をゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

神さびてけるかしの葉もちる
いのるしるなく乃を祈こそと
さもしれぬ世とくくちて苗し
神てさやもしるの山乃果てなし
みえまうゆめいはけの玉垣
つゝもつたてるくらゐやさい
こゝの社乃さるせんん
たのゝそいくゝもあめそのゝ
るるゝ社乃ものもしを
ゆるゝまさけ牡をけるゝ
ねさとまあ社しゝ

榊

ゆゝてやけつゝのるゝよくゝ
さゝさの枝ゝまゝくゝ加ん
葉をけゝくゝしゝあ榊葉い
若ゝゝ年乃さゝ

榊葉を神のゝもゝゝ
ゆゝけるゝ乃ゝ
神代ゝゝゝゝゝあ榊葉い
ゝゝさゝゝゝゝゝ
任弱山ゝ向いゝゝゝ木のゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
万代のゝしゝあたゝゝい
神ゝゝ山乃さゝ木をゝ
ちゝゝゝ神のゝゝ榊葉の
さゝゝゝゝゝゝゝゝ

桂

天の原ゝ月乃ゝて秋のゝみ
月のゝゝゝゝゝゝゝん
我身ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝの枝ゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小篠

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元服

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大宮人乃月まちかねて
我君をいとしこめつゝ作乃枝
もとよりもまつるをうれしかりける
つさしもあ君乃齢いくよ世を
てさしもあ君乃齢いくよ世を
てさしの作のつえ乃ふかるん

七夕

白糸乃むすべるうきまくらを
いくとしの秋つもりぬん
君まてと天七夕ぬ
こうしかの世をこゝろ乃ふかおの
君乃代いなくひさしの白七夕
いくふとせ乃ちぎりあへさるや
乗るあ二条の枝乃生ゆく
ことし七夕をまちけるれ
をしてるやうのこゝろをさる苦や
と来いる世をいとしみん

千年乃宗社乃繁昌
ふるすまちて七夕
つるよ乃多をふへ
七夕をいとしみれ

仙宮

いとけなく山ちを出る時乃ちま
ら人乃くとしのへぬん
ち乃花さてをきこ分入
おもはあさまを年をつける
ちめり色衣の神乃ふれ
みちをせつゝまゝ成る
いてて玉乃蕚の久しく
るうわ世をへぬん
のちり雪のこゝ風こ吉時
月しさやくくしまもいちふ
我ちいさ彩入すんをのくえの

[illegible]

唐人

[illegible]

王昭君

[illegible]

[illegible]

娘女

[illegible]

乙女おいらくおりしき姿ゆえ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

老人

いやもよ顔ゑ沿をかくれこし
[illegible]年のゆさつるか
[illegible]年おおもおもせ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

泉郎

黒牛(クロウシ)くさ出るひまの友船
すきつるまや浪百まくらん
おかいそく川おろ[illegible]
あまの力くと独やぬるん
知くさのあまのけ浪百よ
ふてふさすと山さてくる
ろけ百くくうるのやくるん
くくみめあまいなるとれさけ
ぬ見れくをつきくるれ百を
くつさしてけるとさのあま人
ま岸にやるつさぬるひま小み
いくくのわえてうれくうん
くくくたりふくしつまのひまの
心つくくや袖ぬくすくん

船

おやろやくるくこれ浪百

あくくをみ乃あくくあしきて
雲つくわすめくかぶるくく舟の
おさきさくるかのくくを
をくくしくくわしすまくくさつて
わくくし袖のるくこをる見て
水浅く川際の浪いくりのを
くくすかみ乃ゆやるれ百
くてるや屋くせ乃やるすみを
いくくくしくりせくのくりを
わくくくくふみ乃くさつく
くくをこまわくさを俺か
風いやのるくのくくの舟をわし
いこまわくくあ我方るれ百

隣

冬くれい井垣あくくわ本を
つくくるくや君くくくか

いろこそかわるあい手こそ
ことのはもなほ我身しらず
はこそしるべのそこまでもある物と
わすれじ梅の香ばかりはとまる
こころもとなくなる様をうつるし
あるこころかはしをやてるるさま
ことわりとも花火の烟もしさつ
たりあやしくもしたなるもの
中はこそ物のあるまの友をたけ
なるこころかはりくるしかるる
ものもしらぬさかりさかりの
いさはこそしまの絵をん

笛

山之内のよをさへ月やてるすん
えてもしかのすみのわるか
吹こつる笛のきこえの乃声さけい
のこけさちわしあるとそぶ
きの行をきのうへ人のこそて
きの乃ぶきへつるしるすり
こそりかや宿をこそわ舞をれ
笛のほうくしするしこそ
作乃音をこそそ作のえの
河こそくのこ山をえの多
代星こ神乎やすん笛乎乃
さよふけくこ山ますゆるふ
吉末乃声をのこ返し笛行の
こちく乃夜をて人のもし有

箏

このをこそしてやきへます
世風をしの月もきもし
定のをこそよるこのこそ
つるる所をこそるるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

阿波國文庫

43
20
1